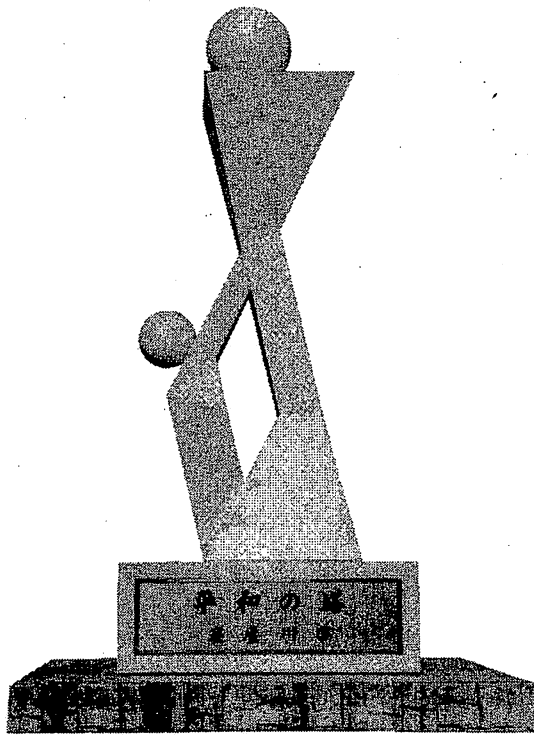


寢屋川市民の戦争体験

記 録 集



寢屋川市

はじめに

太平洋戦争の末期、寝屋川市もアメリカ軍の攻撃を受け被害を被りました。

しかし、広島・長崎の原子爆弾、東京・大阪の大空襲があまりにも被害が大きく、寝屋川市の惨禍はほとんど語られることがありませんでした。

また、昭和41年に発行された寝屋川市誌にもわずか10数行しか記載されておらず、加えて、体験者の死亡や加齢のため悲惨な記憶が失われつつあります。

寝屋川市では、戦後61年を迎えた今年が戦争の惨禍を記録する最後の機会であると位置づけ、体験された方々の証言を基に記録集を作成しました。

この悲惨な記録を後世に伝えることが、現在を生きる私たちの平和への想いを託した未来へのメッセージとなることを願っています。



◎寝屋川市の惨禍を証言いただいた方々（記載順）

- ①中川きしえ さん（葛原1丁目：本人の録音テープでの証言）
- ②浅田 茂 さん（葛原2丁目）
- ③杉本正明 さん（黒原城内町）
- ④藤本小一 さん（点野3丁目）
- ⑤堤下 清 さん（仁和寺本町3丁目）
- ⑥山下 進 さん（下神田町）
- ⑦川口重樹 さん（田井町）



◎聞き手

- 寺西郁雄 さん（平池町）



目 次

(敬称略)

1. 葛原 I (中川きしえ)…………… 1P~ 4P
2. 葛原 II (浅田 茂)…………… 5P~ 7P
3. 黒原 (杉本正明)…………… 8P~10P
4. 点野 (藤本小一)……………11P
5. 仁和寺・木屋(堤下 清) …… 12P~14P
6. 神田 (山下 進)…………… 15P~18P
7. 田井 (川口重樹)…………… 19P~20P
8. 寝屋川市誌抜粋…………… 21P
9. あとがき…………… 22P

● ★ ●

【葛原 I】

中川きしえ さん (84才)

● ★ ●

昭和20年1月、2月に入るとちよいちよい空襲がありました。

2月6日、守口の6番であった通夜に行った時にあり、3月10日には大阪市内に大空襲がありました。

紀伊水道より侵入…と放送があると、すぐ何百機もの編隊で来るのでその爆音はすごかった。

大阪市内の空襲なのに、私らの村も昼日中でも真っ暗になって灰が降って来るんです。

それに艦載機も飛んできました。

B29のように大きくはないが、急降下して低空でバンバンと機銃掃射をすると、すうーと上がって行くので、こっちもうかうかしてられない。

私は菅原神社に逃げて動かないでいれば目立たないだろう、と思って、筵を被ってじっとしていると飛行機は通り過ぎて行き、やれやれ一安心、と家に帰ったこともありました。

5月末頃になると、毎日田んぼへ行って農作業に精を出さねばならないけど、警戒警報が鳴るとぼちぼち退避しなければ、と思うが、空襲警報が鳴るまではすぐだから早く帰ろうと言われて、畑仕事を放っておいて帰ったものでした。

6月15日は空襲があるかもしれないと、朝早くから麦刈りに田んぼへ行ったが、8時頃に空襲警報が鳴って飛んで帰りました。

家に着くちょっと前にザーザーザーと焼夷弾の落ちる音がしたのでその方を見ると、キラキラキラと濃い緑色のような銀色のような焼夷弾が落ちてきた。

なぜあのような色に見えたのか、よくわからないけど、おそらく気が動転していたのかもわかりません。

自分の家が燃えているんです。

家には燃えやすいものばかり取り込んでいました。

菜種、麦、小麦、屋根裏には藁をいっぱい積んでいました。

それであんなに燃えたのかもしれませんが。

お寺の本堂の縁側にも焼夷弾が落ちたが、瓦屋根だからでしょう穴があいただけで燃えなかった。

小西さん宅も押入れに落ちたらしいが、燃えることはなかった。

私の家には屋根裏の藁の中に落ちたせいでいっぺんに燃えてしまったらしい。

おそらく中西金属を狙ったものが、ほんのちょっと外れてこちらに落ちたということなのだろう。

仁和寺にいる夫の妹は、葛原は全滅かと思うほどすごい煙が上がっていた、と見舞いに飛んで来てくれました。

着替えもなく衣類を持ってきてもらってとても嬉しかったです。

焼け跡は3日ほどで片付けました。

当時は何もない時で助け合うこともできず、ほんとに一からの出直しでした。

まあ食物は、おじいさん（義父）とおばあさん（義母）と私で百姓をしていたから、それほど不自由はせずどうにか暮らしていましたが、家が焼けてその晩から寝るところもなく、分家で世話になりました。

2歳の娘が毎晩お家に帰りたい、お家に帰りたい、といひましてね。

もうお家は焼けてないのよ、と言って、焼け跡まで連れて行って見せると得心するのですが、あくる晩になるとまた、お家へ帰ろう、と言う。

毎晩焼け跡まで連れて行きましたが、お家はパーやな、と言うようになってね。

最後には仕方ないと思ったのか、うん、と言ってくれましたが、それはつらいことでした。

その頃は川の水で消火しました。

それで消火のたびに水が減るので、普段は堰き止めて水の量を保っておき、いざ消火となるとその水を放水しました。

3軒の家と集会所が丸焼けになった時も水が足りなかったので、類焼を防ぐために近くの中西さん宅が放水されて水浸しになったとも聞いています。

私どもも家は焼けたが田植えはしなければならない。

それで近所の農家に嫁いだ姉さんが、自分の家の田植えがすむと手伝いに来てくれて、どうにか田植えもできました。

9月になって赤川に爆弾が落ちて、地面に穴はあいたが燃えることもなく、あまり痛みもない家があるので買わないか、と言う話があったので、おじいさんが見に行き、

買うことになりました。

村中の人荷車を持ち寄り、牛に引っ張らせて柱や木材を積んで帰って来ました。

その家は当時の値段で3千円でしたが、正月には入れるように建ててもらうことができました。

8月15日の終戦の日は、焼けてラジオはなかったが、生田さんが持っておられたので聞かせてもらいました。

天皇陛下の玉音放送と言っても、当時は天皇陛下の声も聞いたこともなく、みんな直立不動の姿勢で聞いていました。

これで戦争は終わったのか、とみんなワァワァ泣きました。

夫はビルマで戦死したので、子供を連れて実家に帰ることも考えましたが、私は長女なのでいつまでも世話になっていられない、と思い、舅姑さんはいい方だったので、嫁ぎ先で辛抱することにしました。

それにしても2人の子供を戦地に送ったおじいさん、おばあさんはどんな思いだったでしょう。

帰還した弟さんはスマトラへ行って、2、3回葉書がきましたが、兄貴はビルマの部隊だから負けに行くようなもの、帰還は無理だろう、と言っていました。

私は夫に召集令状がきた時も、夫は帰って来るもの、戦死するとは思ってもみませんでした。

今この歳になるまで暮らしてきて、私はありがたいと思っていますが、わが子を戦地へ送る親の気持ちを考えると、どう言っているのかわかりません。

上から2番目の姉さんには男の子が4人いるので、娘に家を建ててやり、いとこ夫婦として男の子を1人貰いましたところ、戦死した夫の後は自分らで継ぐと言ってくれ、夫の33回忌、50回忌をつとめてくれました。

秦の実家の父は、お前の一家は夫は戦死、家は焼ける、お前の家1軒が戦争をしているようなもの、と言っていました。

子供を連れて里帰りし、百姓が忙しいから一晩だけで帰ると言うのと、家もないのに帰るのは可哀想な、と言ってくれました。

でも、婚家のおじいさん、おばあさんがいい人で実の親のように思って暮らしてきました。

あの時分の戦争のことを思えば、今の平和はいい。

戦争は二度と起こってほしくない。

今も世界で戦争が繰り返され、子供が被害を受けているのをみると戦争は嫌だと思
う。

泥棒に入られて盗難にあっても、家までは手をつけない。

戦争で火災を受けると何一つ残らない。

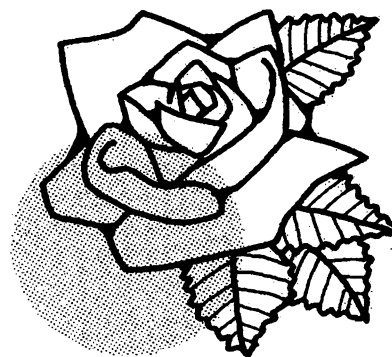
みんな灰になる、と世間の人と言ったが、そのとおりだと思います。

(追記)

中川きしえさんは、平成13年9月5日、84歳で亡くなりましたが、その1年
前までは、病気一つしたことがなく元気に過ごしてこられました。

平成12年の6月、点野小学校の井畑晴美先生（現在は和光小学校に勤務）がきし
えさんの話をテープに録音してくれていました。

娘の中川喜美子さんの話では、きしえさんは九個荘裁縫学校に通って和裁を習われ
たそうで、嫁ぐ時にたくさんの和服を持ってきたのに、あの空襲で全部焼けてなくし
てしまった、とよく口にされたそうです。



※ 筵=むしろ

※ 藁=わら

※ 艦載機=戦艦に搭載されている戦闘機

※ 爆撃機=爆弾を投下するための戦闘機（例：B29）

● ★ ●

【葛原Ⅱ】

浅田 茂 さん (70才)

● ★ ●

葛原に焼夷弾が落ちたのは、6月初めの麦の刈り入れ前で、葛原の30軒余りのうち松浦さん、中川さん、それに浅田の分家の3軒と集会所が全焼、そして北口さん方が半焼しました。

私たちの家族は、父が40歳近くで出征したので、祖母と母ときょうだい3人でした。

おじにあたる人も召集がかかって戦地へ行っていました。

空襲警報が出ると、私たち家族と親戚の者2人は防空壕に入ったが、シャーシャーという音とともに爆弾が落ちてきた。

1トン爆弾ではなかった、と思うが、かなりの衝撃がありました。

辺りが少し静かになって、今度はパチパチと音がしたので、防空壕をでてみると、六角筒の焼夷弾があっちこっちで燃えていました。

家の防空壕は納屋の庇の下に掘ったもので、このまま入っていたら危ないから外に出よう、という母の言葉に従って、田んぼの中へ逃げました。

家の燃える勢いが強くなってきたので、おさまるまで田んぼにいました。

しかし、田んぼに落ちた焼夷弾は依然としてパチパチと燃え続け、家の前の神社の竹藪にも焼夷弾が落ちてひどく燃えていました。

現在の京阪牛乳の近く、対馬江寄りの田んぼに、何発もの不発の焼夷弾が固まって落ちて10メートルほどのすり鉢状の穴があいていました。

中西金属をねらったものがはずれたのかも知れません。

家は年寄りばかりで、2、3人がホースで水をかけるだけでしたが、家の火はおさまったので、田んぼを出て行きました。

怪我人はなかったのですが、不発弾が軒下に突き刺さり、しばらくは触るな、と言われて1年近くそのままにしておいたように思います。

お寺の庇にも突き刺さっていたし、農作業をするときに気付いたのだが、田んぼにも突き刺さっていました。

長さが1メートルほどで危ないので手を付けないでおきました。

このような体験はこれ1回だけでした。

九個荘尋常高等小学校に通学する子供たちは、通学路に近い田んぼ路を通って近道をしたものですが、女の子が機銃掃射で狙われたことがありました。

たまたま怪我はなかったのですが、通学する小学生が危険な状態にあるというので、分散授業をすることになりました。

昭和20年頃は、学年ごとに点野、池田、葛原に分けて、午前中は寺で勉強することになり、学年ごとに通学しました。

7、8年前の同窓会で木屋の岩田先生が、即円寺の分散授業で教えに行っていた、と話されたのを聞きました。

空襲があると火があっちこっちで上がって怖かったです、藁葺き屋根に火が付いて炎が高くあがって燃え立った時の印象が忘れられないほど強く残っています。

夜に空襲警報が鳴ると、眠たくて駄々をこねて防空壕へ入るのを嫌がったのを覚えています。

それに田んぼへ逃げたら何とかなるという気持ちもあったように思います。

二つ上の姉は入ったが、私と二つ下の妹は嫌がるので、母は2人を防空壕へ入れるのにてこずったらしいです。

村の30軒の家が、いつ燃えるのかとても不安な日々が続きました。

艦載機が大阪湾から上がって京都の方へ向かう様子も忘れられません。

夜、大阪市内で空襲があると、火の雨が降るように見えました。

また、昼間に空襲があると、2、3時間後には晴れていても真っ暗になるんです。煙がただよい、灰が落ちてくる。

灰が田んぼの間の水路に落ちると、どじょうやふなが死んで浮いていることがありました。

田植えの時期は水が少ないので、そこに灰が落ちると魚が浮いていました。

鶏の餌にしようと捕ったこともありました。

父は20年の1月に召集されて八連隊に入隊し、外地へ行くというので、母と私達子供2人が面会に行ったことがあります。

その時の大阪市内は丸焼けでした。

父は終戦の時はソウルにいたそうです。

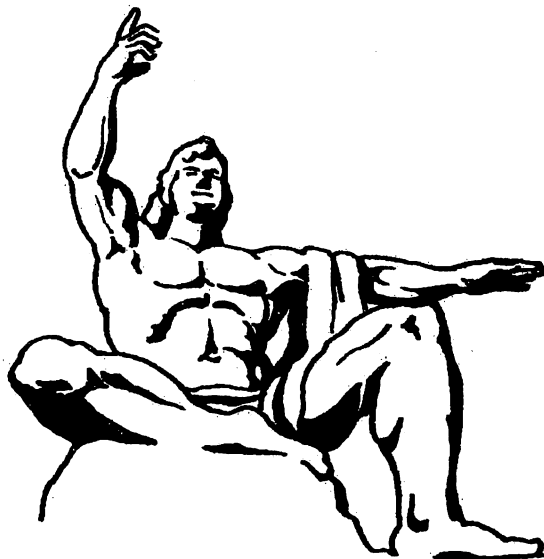
家内の兄は枚方の禁野火薬庫で働いていましたが、昭和14年3月の爆発事故で亡

くなつたと聞いています。

終戦の15日の夜は、電気を点けてもいい、といわれて、いつも真っ暗にしていたので子供心に嬉しかったのを覚えています。

戦後61年、戦争を語り継ぐ人も少なくなっています。

歳をとって戦争を語るのも苦勞がありますが、戦争を忘れたくはないです。



● ————— ★ ————— ●

【黒原】

杉本 正明 さん (78才)

● ————— ★ ————— ●

昭和20年の6月の20日過ぎの何日かはっきり覚えていませんが、麦刈りの時期でした。

私の家は被弾を免れたが、東隣の乾家、南西の乾家、西隣の杉本家の3軒に焼夷弾が落ちました。

その時私は家にいませんでした。

父母も田んぼへ出てました。

東隣の乾さん宅は井戸端に落ち、弟さんが布団を被せて消したそうです。

南西の乾さん宅は藁葺きだったので焼夷弾が屋根に止まり、屋根だけ丸焼けになりました。

西隣の杉本さん宅も土間に落ちたと聞いています。

被弾した3軒乾肇さん、乾数匡さん、杉本卓さんは出征されていたので、家族や近所の人が手伝って消火されました。

私の家の東隣から対馬江にかけての田んぼにも白昼何十発もの焼夷弾が麦畑、菜種畑に落ち、パチパチと燃え地面に突き刺さって火を噴いているものもありました。

空中で分解してばらけ花火のように見える六角筒の焼夷弾です。

父は、24日に火事見舞いに行ったと日記に書いていますから、6月22、3日頃だったのでしょう。

黒原の戸数は45軒ほどで、なぜこんなところへ焼夷弾などを落とされたのか、と思いましたが、大阪市内で使った残りを落としていったのではないかと近所の人が言っていました。

当時、私らの年代の者は戦争に絶対勝つ、と信じていました。

誰も負けるとは思っていなかったと思います。

軍国主義教育は徹底していたんですね。

しかし、事情に詳しい人は、これはもう駄目かもしれない、と考えていたのではないのでしょうか。

私らのところへ落ちたのは焼夷弾が1回だけでしたが、東京、大阪は何回もの空襲で焼け野原になったと聞いていました。

広島、長崎に落ちた原爆も特殊爆弾というくらいにしか知らされていませんでした。空襲警報は頻繁に鳴りました。

ラジオで紀伊半島から尾鷲の上空を通過してB29が進入してくるとよく聞かされました。

高射砲の砲弾もB29に届かずにずっと手前でパッパッと破裂するのを見ていました。

私は昭和3年4月生まれで、20年3月は旧制中学校4年生で17歳でしたが、学校で勉強するのではなく、徳庵にある近畿車輛（当時は田中車両）へ勤労働員で狩り出され、3月末まで働いていました。

仕事は、車両を作る工程の鋳造に配属されました。

当時は金属類が不足していたので屑鉄を集めて電気炉に入れて溶かし鋳物を作っていました。車両の製造工程のなかでできた金属の破片はどんな物でも集めていました。

昼食は会社から出ましたが、卵ご飯かな、と思って食堂へ入ったらトウモロコシの混ざったご飯だった、というようなこともありました。

その年昭和20年だけが繰り上げ卒業ということで、4年生と5年生が一緒の卒業でした。

兵役も20歳から19歳に繰り下げられた年で、近所では一つ年上の吉田さんが19歳になった6月に召集され、8月15日の終戦で帰ってこられたという時代でした。

私の家族は祖父母と両親、兄弟6人、姉妹2人、家族で戦地へ行った者はいませんでした。

防空壕は家の裏に4、5人は入れるくらいのものを掘っていましたが、空襲警報が鳴っても小さい弟、妹を先に入れて長男の私は入ったことがありませんでした。

田中車両で空襲を受けたことはなく、初めて空襲警報を聞いたのは旧制中学2年生の昭和17年だったと思います。

艦載機が通り過ぎた後に空襲警報のサイレンが鳴ったのを覚えています。

戦時中でも、農家だったので食糧で特に不自由をしたということはありませんでしたが、満腹というわけにはいきませんでした。

米の供出制度があって、一般家庭は1人2合3勺、農家は3合3勺であったと思い

ます。

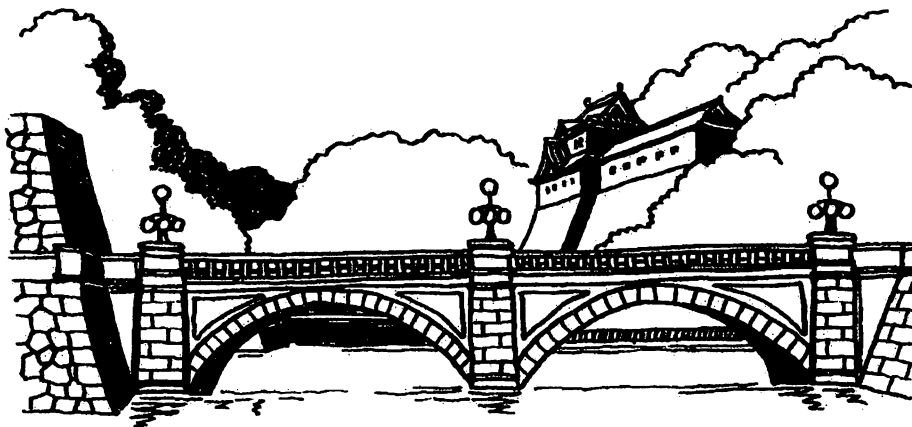
私たち農家は自分たちで作った米は1年間分の飯米として家族数だけ保有して、残りは供出といって国に売り渡すことになっていました。

誰かが米を売ってくれと言ってきても、勝手に売買することは闇取引きといって禁じられていたのです。

保有米の中で余裕があれば売った人もあったとは聞いていますが。

戦争が終わったという実感は、年齢層によっても違うでしょう。

空襲警報は鳴らないし、B29の飛行機は飛んでこない、電灯も明々とつけることができ、終戦を実感したというところでしょうね。



● ————— ★ ————— ●

【点野】

藤本 小一 さん (74才)

● ————— ★ ————— ●

戦争中、寝屋川市葛原へ焼夷弾が投下された状況について、点野地区ではその時に見た人はいなかったが、もし見た人があったとしても、高齢のため亡くなったり、認知症で記憶が確かでなく聞くことができません。

投下された焼夷弾が数十個かそれ以上の数であったかわかりません。

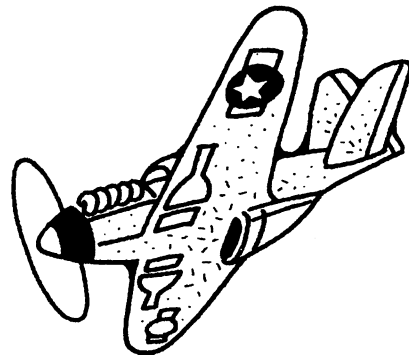
焼夷弾が投下されて1日後に、田や畑に落ちていた焼夷弾をスコップで掘り返して、6個ほど持ち帰ったという数人の人たちより聞いた話ですが、点野に帰宅するまでに巡査に話をしたところ、実験をしてみようと十数人の人たちと一緒に村はずれまで行き（現在の市道平池・点野線）、藁などを燃やしてその上へ不発弾を1個置いて突っ突いたりしていた。（その前に投げ付けたり、たたいたりしていた。）私も見ていたが、数分後、2、3人が帰宅したところ大音響がし、多数の人が集まってみると、爆発した切れ端が警官の足を直撃し、川へ吹き飛ばされた警官は数人で助け上げられて病院へ運ばれました。

他にも2人ほど軽傷者があったと聞きました。

また、後日枚方の病院へ見舞いに行った人が、その帰り道で空襲にあい、500キロ爆弾が田井の堤防付近の田や畑に落ちたそうです。

大きな穴があいたが、長い間放置されたままだったそうです。

木屋の淀川堤防付近の牧場付近も被弾があったそうです。



● ☆ ●

【仁和寺・木屋】

● ☆ ●

堤下 清 さん (78才)

B29がばらまき空中で破裂してばらばらと落ちてくる六角筒焼夷弾が、仁和寺と葛原の境にあった田んぼに60発ほど突き刺さっているのを見たことがありました。

私は、何とも思わずにそれをリヤカーに積んで家に持って帰り、門の前の下田に置いたことがありました。

爆弾は仁和寺には落ちていませんが、大日に落ちました。

1月29日、B29が来襲して爆弾を5発落としました。

そのうち1発は村次さん宅に落ち、家は全壊し、家族全員が亡くなりました。

4発は田んぼに落ちました。

後で見ると直径10メートル以上の穴があいていました。

私は、空襲警報が鳴ると、近くの火の見櫓に上がったことがありました。

シュルシュルという音がしたかと思うと、パッパッと火が噴き、高圧線が切れるという光景を見て、これはいつ何時爆弾が落ちてくるかわからない、と思うようになりました。

葛原、仁和寺には焼夷弾が落ちました。

昭和20年6月頃、田植え前によく艦載機が淀川沿いに上がって来ました。

仁和寺では一人だけ、坂口寿一さんの妹さんが不幸な目にあわれました。

妹さんは守口町土居の駅近くにあった松下病院へ看病に行っていて、空襲警報が出て防空壕に逃げようとしているところへ機銃掃射を受けて亡くなりました。

私共は親戚でしたから、母が弔いに行きました。

私より二つ年上で20歳になったばかり、それは二目と見られない変わり果てた姿になっていたと聞きました。

私なども水かき車を踏んで田んぼに水を送っている時など、上空を艦載機が飛んで行くことがありました。

他には中西金属の社宅があった仁和寺の平ノ町に焼夷弾が落ちています。

それが黒原から葛原までつらなって50メートル間隔で焼夷弾を落としていったの

ではないかと思えます。

木屋にも揚水機の設置工事がまもなく完成という時期に爆弾が落とされました。

淀川の水を取り入れる揚水機を設置するために昭和14年頃から計画されていたもので、17年、18年と早魃続きで工事が急がれていました。

九個荘村からは工事の手伝いに行っていました、仁和寺からも何人か手伝いに行きました。

私は学校を卒業した年に、もっこ担ぎをしました。

完成に近付きつつあった20年6月15日に爆弾が投下され、揚水機は破壊されてしまいました。

また、神田に爆弾が落ちた時は、家が揺れるほどの衝撃でした。

たぶん1トン爆弾だと思いますが、大きな穴があいていました。

淀川堤防筋にも爆弾が落ち、堤防決壊も考えて水防団の人たちが穴埋めに行きました。

私は昭和3年生まれで、中西金属に勤めていました。

中西金属へは挺身隊の女学生が来ていました。

その女学生のために、淀川に通じる道の下を流れる川の兩岸に筏のように板を並べた防空壕や仁和寺神社にも防空壕が作られていました。

ところが、大阪市内から来ている女学生が多く、夜に空襲があると翌日出勤する女学生は半数にまで減っていたこともありました。

天満にあった中西金属本社の防空壕に入っていた女学生が、蒸し焼きになるという悲惨なこともありました。

空襲警報が鳴ると、会社の青年学校の生徒がメガフォンを持って、工場内を1棟ずつ「退避せよ」と伝令を出しながら回っていました。

本当に仕事どころではなかったです。

会社で作ったベアリングは牛車で本社まで運んでいましたが、それは1日がかりの仕事でした。

家には防空壕が掘ってありましたが、私は入ったことはなく、年寄りらが入っていました。

空心町に空襲があった日は見に行きました。

大日や八雲の辺りも東洋紡績の工場があったので、爆撃にあったと聞いております。

私はB29が淀川を上がってきて、編隊を崩さずに生駒山を越えていくのを目にし

ましたが、日本の飛行機は1機も飛ばなかった。

今まで負けたことのない日本、心の中では勝つと思っていましたが、食べるものはない、着るものもない、まちは焼かれる、こんなことで戦争に勝てるのかと思ったこともありました。

戦時中も大阪市内から買出しに来ました。

金で買う人もあれば、物々交換もありました。

じゃが芋などの食物が多かったですが、米だと1升か2升、それとわからないように腹にまいて帰って行きましたよ。

肥料は配給制度でした。

8月6日にアメリカ軍が特殊爆弾を落とすと聞きました。

それが原子爆弾と呼ばれるものであることを知ったのは後のことでした。

8月14日、仁和寺の一つ年上の知り合いが出征することになりました。

和歌山に入隊するというので、私は送っていきましたが、その帰り、大阪市内は昼間の大空襲のあと、まだ燻り続け煙が上がっていました。

京阪電車の京橋駅も焼けていて、線路伝いに関目まで歩きそこから電車に乗って帰りました。

8月15日はラジオで玉音放送を聞きました。

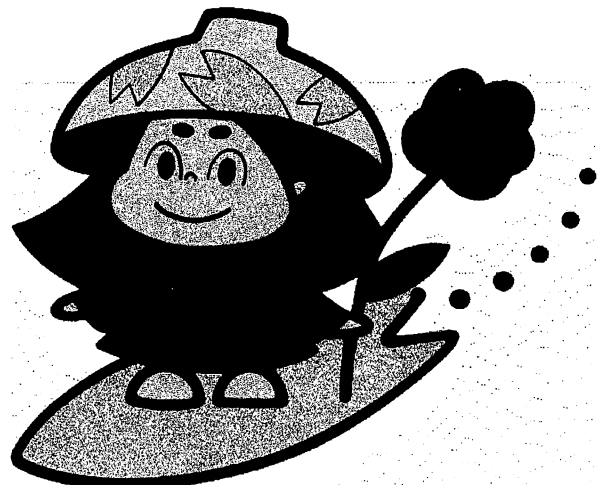
何もわからないまま直立不動の姿勢でいましたが、ただ1人だけわかった人がいて、戦争が終わったことを知りました。

16日は会社でも全員が集められ、戦争が終わったと聞かされました。

私の家族は5人きょうだいで、長男の兄は飛行機乗りでミンダナオ島で戦死しました。

※早魃＝かんばつ

※もっこ＝むしろ又は縄や竹を網のように編んだもので四隅に綱をつけ、土や肥料などを盛って運ぶ道具



● ————— ★ ————— ●

【神田】 山下 進 さん (72才)

● ————— ★ ————— ●

祖父・山下久太郎は昭和20年6月26日、牛と田んぼに出ている、投下された爆弾のために62歳で亡くなりました。

私は昭和9年6月18日生まれの11歳、国民学校の5年生でした。

事の起こりは、その日、警戒警報が鳴ったので、牛を使って田んぼを掘り返していた祖父を母が迎えに行ったが、祖父は田のほうが安全だから帰らない、と言った事でした。

それから空襲が始まって爆弾が2発落ちました。

私は家の横穴掘りの防空壕に入っているすごい爆風を感じ、爆弾が落ちたのはどの辺りだろう、と思っているところへ、叔母が、牛だけ背中に土を背負って帰って来た、と知らせに飛んで来てくれました。

牛は祖父の妹の乾家から借りていたものだが、私は、これはえらいことだ、と思い、すぐに捜しに行ってみると、祖父がいた田んぼ付近には大きな穴が二つあいていました。

土手道が二つに切れたところに水が溜まっていたが、そこに祖父はいません。

私は穴のあいているところを見て回りました。

水の溜まっている爆弾の穴を熊手で掻いているのを見て、子供心にそんなところに祖父がいるのだろうか、と思いました。

また、石橋の崩れた石積みにはさまった学生帽が目について不思議に思いました。

捜しに来る人がどんどん増えてきたが、そのうちにもう見つからない、という雰囲気漂い始めてきました。

祖父は、農業会の関係で九個荘村のために骨身を惜しまず働いていましたので、九個荘村の消防団が総動員で捜そうということになりました。

ちょうどその時、山下馬吉さんが「ここら辺りを掘ってみよう」と言って掘ろうとしました。

すると周りにいた子供たちが怖がって逃げていきました。

掘り始めると、スコップの先がカチッと何かに当たる音がしました。

それはベルトの部分のようだったが、掘り続けると麦藁帽子の縁が出てきたので、これは頭の方だから手掘りにしよう、と手で掘り返しました。

すると臍が見えてきた。

麦藁帽子の縁が見えたのだから頭だと思っていたら、爆風で帽子の縁が腹のあたりにまで落ちてくっつき、それで仰向けの状態で臍が見えたのだろう。

祖父は口元の端に少し傷があっただけで、五体に傷はありませんでした。

祖父の死について、そこまでは覚えています。

スコップで少し掘ると、カチッと音がしたというから、祖父は全身に30センチほどの土を被っていたのだろう。

祖父の倒れていたのは、爆弾が落ちた穴の縁から5メートルほど離れたところ。

爆弾が落ちたときに私が入っていた防空壕は、その地点からは300メートルくらいで、私は、その時の爆風でしばらくの間、耳の鼓膜がおかしく感じたくらいだから、よほど強烈だったのだ、と思います。

その時の様子は母の手記に詳しく記され、今それを読み返しても涙が出てきます。

祖父の遺体を家まで連れ戻すことになって、戸板を取りに帰ったとき、私は祖父の枕を持って行きました。

しかし、戸板に寝かせた遺体に枕をあてがうことができなかつたので、私は後から枕を抱いて帰りました。

祖父は体が大きく頑丈な人でした。

葬式のときは、孫の私に重みがかからないように棺を担わせてもらい、墓地の焼き場まで行きました。

祖父の頭の皿は、爆風のためか黒くなっていたのを思い出します。

それにしても、すぐ際に京阪電車があり、その向こうに中木田の変電所があったので、それを目印に爆弾を投下したのではないか、と思ったりもします。

ちょうど京阪電車は空襲警報発令中で停止し、乗客は退避中でした。

なぜ、祖父一人が牛といた田んぼに爆弾を落としたのか、今もわかりません。

それからというもの、牛は逃げて帰って来た道を通って田んぼへ連れて行こうとしても絶対に行きませんでした。

嫌がって動こうとしないので、京阪電車の萱島駅の方から西側に回り道をし、牛を騙して田んぼへ行ったそうです。

牛は賢いです。

あれは1トン爆弾ではないと思います。

艦載機が500キロ爆弾を落としたのではないだろうか。

私も艦載機が7、8機、北の空を東の方へ行くのを見たことがあります。

その中の1機だけがこっちへ回ってきて、操縦する眼鏡の兵士の顔が見えるほどの高さを飛び過ぎて行き、天辻の辺りに機銃掃射するのを見たことがあります。

あの種の艦載機が積んでいた500キロ爆弾を二つ落したのだらう、と想像します。

私は、家の屋根に上がって大阪の空襲を見たこともあります。

屋根の上からは、大阪城も見えました。

灯火管制など何の役にも立たなかった。

空中で炸裂した照明弾が五つくらい強烈な光を発しながらぶらぶらと落ちてくる大阪方面は、夜でも昼のような明るさ。

その後から爆弾を落とし、焼夷弾を落とした。

天満橋に爆弾が落ちたときは、電車に乗って見に行ったこともあります。

電車は当時の片町までしか行かなかったもので、そこから引き返したことを覚えています。

大阪の空襲がすんで、空襲警報が鳴ってB29の編隊が向こうの方に見えたら防空壕に入っていないさい。

上空に来たら、防空壕を出てもいい、と言われたものです。

高射砲の弾は、B29が先へ行ってしまった後、それも下の方までしか届かない。

日本の飛行機は少しも飛んでいない。

B29はゆうゆうたるもので、あんなのを見せつけられると、敗戦もやむを得なかった、と今になって思います。

祖父の思い出はつきません。

祖父はとても厳しい人で、私はよく叱られて、おうこを持って追いかけられたこともあります。

大きな祖父が立って伸ばした両腕に、私たち子供は鉄棒のようにぶら下がったりして可愛がってもらいました。

歯が強くて煎った空豆をバリバリ食べたりする姿を思い出します。

祖母は、ずっと9月13日の夜には月見をしていましたが、昭和44年にアメリカの宇宙船アポロが月面に着陸すると、祖父の死を思い出して、アメリカの国旗が立っ

ている月は見たくない、と月見をやめてしまいました。

祖母の祖父への想いを知って胸が熱くなりました。

父は満州から帰ってからしばらくしてビルマへ出征したが、捕虜になってマラリヤに罹ったりして25年に帰国しました。

それまでは男手がなく、母はとても苦勞したと思います。

私は母と買い出しに行って、泉州でさらし木綿を買い、体に巻き付けて家まで帰ってくると、それを売って米にしたこともあります。

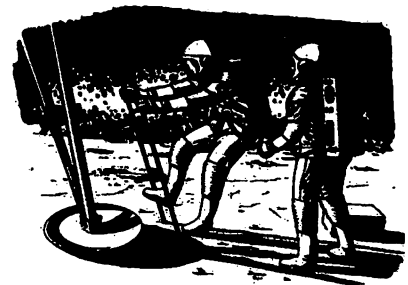
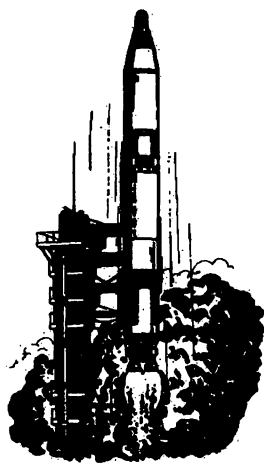
そんな母と私は、よく祖父が倒れた場所＝現在はゲートボール場の道とトイレの間、当時は土手道だった所へ行き酒を供えて祖父を偲びました。

母にとって、祖父は、一人娘の自分を目に入れても痛くないほど可愛がってくれた父親。

また、明治からずっと蒟蒻を作り、村の人からは「こんにやく屋」と呼ばれてとても親しまれていた父親でしたから、母は感慨もひとしおであったろうと思います。

※蒟蒻＝こんにやく、臍＝へそ

※おうこ＝両端に荷物をかけてかつぐ棒



————— ● ————— ★ ————— ● —————

【田井】 川口 重樹 さん (79才)

————— ● ————— ★ ————— ● —————

昭和20年、私は18歳でした。

当時、多くの同級生は出征していました。

私も心構えはできていましたが、早生まれのために出征しないで、枚方警察署の屋上にあった監視署に勤めていました。

双眼鏡で飛行機の機種や高度を判断して、大阪府庁へ報告する仕事でした。

6人ほどの班をつくって昼夜班ごとに2人ずつ交代して監視していました。

枚方のほか、寝屋川からは田井、三井、郡、太秦から来ていました。

私は終戦まで監視署に勤めていましたが、大阪市内の空襲の時は、投下された爆弾や焼夷弾で焼け焦げた紙切れなどが風に乗って飛んできたのを覚えています。

私が、爆弾が投下されたのを体験したのは、昭和20年の初夏の頃だったと思います。

善行寺の前にあった知り合いの家に行った時に空襲警報が鳴ったので、自宅に帰る途中、近くに爆弾が投下され、気が動転して傍の川の中に飛び込んでいました。

爆弾は2発でした。

八尾枚方線に通じる現在の国道170号、善行寺の東側、当時は六間道路と呼ばれていた堤防道路に1発。

そこから50メートルほど東に離れた田んぼの中にもう1発投下されていました。

私は、川の中に逃げたものの砂が雨のように落ちてきて、怖かったのを覚えています。

堤防道路の斜面の砂が爆風で舞い上がって落ちてきたのでしょうか。

2、3日して見に行ったら、道路は幅7割ほどが抉り取られるように崩れ落ち、田んぼにも大きな穴があいていました。

幸い怪我人はありませんでしたが、善行寺の屋根がかなり損傷し、瓦が割れるなどの被害はありましたが、民家に被害はありませんでした。

当時、村には防空壕はなかったように思いますが、田井のこの辺りにも艦載機が飛

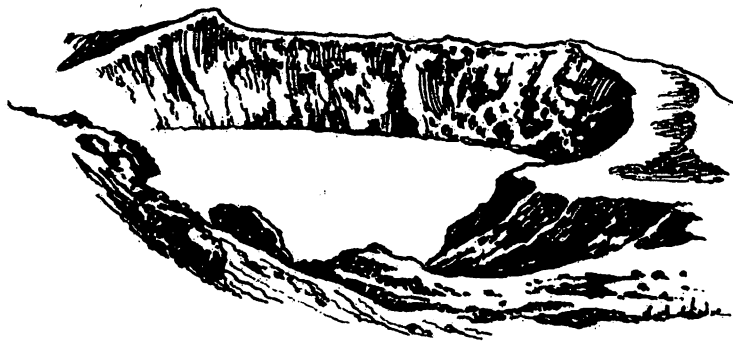
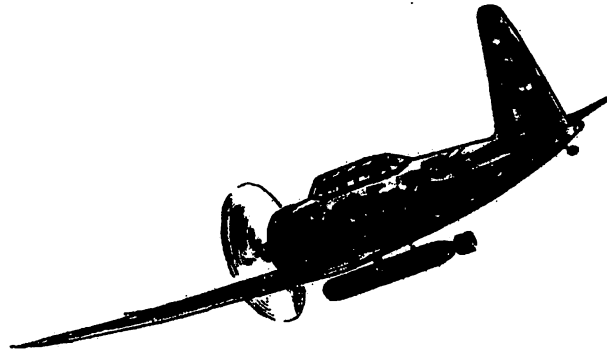
んできて機銃掃射を受けたこともありますが、怪我はありませんでした。

よく聞いたのは、田井と石津の境の道、その周辺は蓮池が多かったのですが、そこらにも機銃掃射があったそうです。

村から出征して戦死した人は7人ほどだったと思います。

村の戸数は50軒ほどでしたが、戦時中は枚方、交野で第四師団の陸上演習が行われ、兵隊が各家庭に泊まりました。

また、戦争が激しくなってくると、都市から個別に疎開してくる家庭もあったが、それは数えるほどでした。



当 地 の 戦 災

昭和19年からはじまった空襲は翌20年に入って激化し、日本の重要都市はほとんどその洗礼を受けて、焦土と化した。当地方へもこの年6月15日、米爆撃機29が淀川沿岸を北上し、途中各所に焼夷弾を投下した。

仁和寺の中西ベアリング工場が軍需工場なのでこれを投下目標としたらしいが、弾はずれて仁和寺から葛原のたんぼの中に落ち、仁和寺では東光治方に12発、八畳一間を焼いたのみで消し止めた。また、黒原の乾潔方は全焼し、葛原では中川喜次郎、松浦竹次郎、浅田秋造と集会所が全焼、外に北口兼吉方は屋根のみを焼いた。

木屋の淀川左岸土地改良区のでき上ったばかりのポンプ場が焼けた。田井では南与右衛門方付近の堤防に落ち、また、中木田から神田飛地（現京阪車庫）に至る中間の水路付近に1トン爆弾が落下して大穴をあけた。その時、付近で牛耕中の山下老人（神田）が爆死し、牛だけが主家にたどりついて人々の涙をそそった。

走行中の京阪電車も停車して乗客は堤防に避難中、学生2人が負傷した。また、仁和寺阪口利一の娘は守口の松下病院で退院準備中を飛行機からの銃撃を受けて死亡した悲劇もある。都会と異なり、当時まだ農村であった当地は戦災といってもこの程度で、都会の悲惨な被害に比ぶべくもない。

（昭和41年11月に発行された寝屋川市誌より抜粋）



編集：寺西郁雄

発行：寝屋川市

寝屋川市本町1番1号

電話 072-824-1181

F A X 072-825-2078

あ と が き

記録集作成にあたり、お話を聞かせていただきました方々には60余年前の悲しい
或いは苦しい体験を思い起こしていただきました。

聞かせていただいた体験談を出来るだけ生の声として残しておきたいとの思いから、
原則として、話し言葉のまま、ほとんど修正を加えていません。

従って、文章表現や言葉遣いに多少難解或いは疑問を感じる部分があったり、また、
現代人には想像しがたい用語が使われている箇所があります。

実体験者の生きた言葉としてご理解いただき、その底に流れる平和への想いをおく
み取りご斟酌下さい。

ただ、戦後60余年を経過したとは言え、寝屋川市内における戦災を体験された方
はまだまだおられると思います。

寝屋川市誌に記載されていない被害やあるいはこの記録集とは違う体験をお持ちの
方がおられましたらご連絡いただければ幸いです。

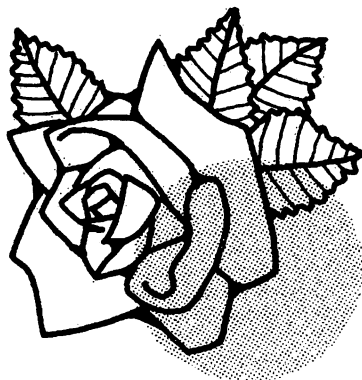
今回が最後の機会であるとの思いで取り組んでまいりましたが、これで終止符を打
つわけではありません。

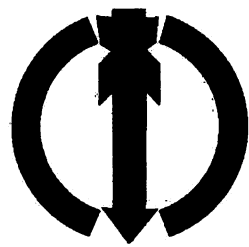
ご協力いただけるのであれば、もっと多くの情報を歴史として残していきたいと考
えています。

ぜひ、ご協力下さい。

平成18年8月

寝屋川市人ふれあい部人権文化課





平成18(2006)年度作成